

中原徳太郎・小此木信六郎・塩田広重・

近藤達児の医学校の再建

— 日本医学専門学校から日本医科大学昇格迄の困難な道程 —

唐 沢 信 安

一、はじめに

濟生学舎⁽¹⁾の廃校後に、紆余曲折を経て再建された財団法人日本医学専門学校では、文部省の指定が得られぬために、大正五年五月学校騒動が起こり、在学生四百余名は総退学した。そして新たに私立東京医学専門学校を新宿に創立した。残された日本医学専門学校では、廃校寸前に陥り経営困難となった。この時、残れる学生の救済と学校の再建に立ち上ったのが、医学博士中原徳太郎、ドクトル・メヂチーネ小此木信六郎、医学博士塩田広重、法学士近藤達児の四名の指導者であつた。

この四名の学者達の活躍について述べてみたい。

二、中原徳太郎校長就任と内外の情勢

中原徳太郎が、前校長山根正次より推薦されて日本医学専門学校の校長に就任した経緯について、前理事であつた磯



中原 徳太郎 校長

部² 検蔵は次の如く回想している。

『学校の増改築で、二十数万円の負債を生じ、やり切れなくなった。そこで余は負債整理のため学校を退き、後事を中原君に委託すべく相談したところが、中原徳太郎は、「それは気の毒だが僕一人ではどうかと思う。塩田広重君と兩人ならやつて見よう」との返事があつた。そこで同窓の長沢米蔵・坂本和三郎と協議の上、公式に中原・塩田の両君に後事を依頼した。

中原君は非常に俠気のある人物で、経営困難な学校を引き受け、東大教授の塩田広重と、ドクトル・メヂチーネの小此木信六郎及び法学士の近藤達児を仲間に入れて、四名で大正七年四月二十日、私立日本医学専門学校の再建に着手した。』

更に磯部は次の如く言葉を続けている。

『然るに専門学校の校長は、概して年俸五千円はとるものだが、君は一銭の俸給も取らなかつた。(中原病院の収益を以て生活を維持した)』と語っている。

眼を転じて、当時の我国の医学教育の様子を述べてみたい。

大正七年十二月六日に「大学令³」が公布され、翌年三月に「大学規定」が発表された。それによると、官立の帝国大学以外に、私立の単科大学が認められる事になった。

政府は四千四百五十万円の教育費を第四十一議会に提出し、大正八年より十二年迄に、千葉・長崎・新潟・岡山・金沢の各医学専門学校を単科医科大学に昇格させた。

また、大阪府立高等医学専門学校も大正八年二月には大学に昇格し、愛知県立医学専門学校も大正九年に大学に昇格した。更に京都府立医学専門学校も大正十年十月に大学に昇格している。

一方、私立の東京慈恵医院医学専門学校⁽³⁾でも、大正七年の大学令の公布を知り、学生達が大学昇格運動を起こした。高木兼寛校長は、その懇請を入れ慈恵会及び学生達の寄付金二十六万円と、高木家より二十三万円が準備金として立てられ、基本金五十万円が調達された。その結果大正十年十月十九日に東京慈恵会医科大学に昇格している。

また、慶応義塾大学⁽⁴⁾では、大正五年八月医学部設立の趣旨を發表し、皇室より大正六年一月十日、三万円の御下賜金があり、各種財界に寄付金を求めたところ、目標額百万円の所、超過金額三百万円の募金が集まった。そこで神宮外苑近くの、旧陸軍省用地二万八千坪に校舎を建築し、大正六年三月、新入生を募集し、同年四月に開校した。

つぎに日本医学専門学校と特に関係の深い東京医学専門学校と、東京女子医学専門学校の大学昇格運動に触れてみたい。

東京女子医学専門学校⁽⁶⁾では、大正九年に文部省の指定を受けている。さらに大学昇格のチャンスとして昭和十二年に校長の吉岡弥生は「教育審議会」の委員となり、文部省に対して、女子のための女子高等学校の制度を認めさせ「大学令」による大学の創設を認可するという答申を出した。しかし、戦局の悪化のため、審議会の答申は実現されなかった。戦後の昭和二十一年十二月には至誠会（東京女子医専の同窓会）に大学昇格期成同盟が結成され、募金と校舎の整備を
行い昭和二十五年三月に大学昇格が実現した。

他方、東京医学専門学校⁽⁷⁾では、大正九年に文部省の指定を受け、昭和十七年に大学昇格の申請が文部省に提出されたが、文部省は軍当局の意向を受けて、教育の短縮を望んでおり、大学昇格の申請は当局の指示により、取下げられた。

昭和二十一年一月、東京医科大学昇格の申請が改めて文部省に提出され、昭和二十一年二月一日に大学設立の認可が
内示された。

三、中原・小此木・塩田・近藤の略歴

○中原徳太郎⁽²⁾⁽⁸⁾

中原は明治四年七月二十日、京都市上京区二条通り柳馬場東入ルの御典医中原吉右衛門の長男として生まれた。

京都独逸語学校に学び、十七歳で上京し、独逸協会学校に入学、さらに一高に進み、明治三十二年十一月に東京帝国大学医科大学を卒業している。同期生二十九名の中に親友の塩田広重がいた。

卒業と同時に外科学を専攻してドイツ人教師スクリバ (Julius Scriba) に師事し、翌年の明治三十三年十一月に宇野朗元帝国大学外科教授の経営する「栞山堂病院」(浅草区小島町)の副院長として就任している。恩師スクリバには大変可愛がられ、後日息子のフリッツ・スクリバの養育係を命ぜられた程である。

明治三十五年一月より「済生学舎」外科学講師を嘱託さる。明治三十六年の済生学舎廃校後には石川清忠講師の設立せる「私立東京医学校」の講師として、旧済生学舎の学生の救済に当っている。

明治四十年七月より二年間のドイツ留学を果たし、明治四十四年六月には医学博士の学位を得ている。

大正三年九月に中原は日本医学専門学校教授に就任す。同年六月に中原病院を日本橋高砂町に創設して大いに繁栄す。大正七年四月に日本医学専門学校の校長に就任して中原病院をほとんど顧みるいとまもなかった程、東奔西走して学校の再建に専念した。

○小此木信六郎⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾

小此木信六郎は、万延元年三月六日、福島県二本松藩の藩医小此木間雅^{かんが}の六男として生れた。

信六郎は福島第一小学校より、須賀川医学校に学び、明治九年に上京して東京医学校(現東大医学部)予科に入学している。時に十六歳であった。明治十八年大桶^{おおが}みつと結婚して明治二十一年七月八日には思う所ありて帝国大学医科大学



小此木信太郎理事長

を中退し、ドイツに留学している。
チュービンゲン大学に入学して同二十四年に卒業し、ワーゲン・ハウゼル教授 (Wagen Hausser) の下で、「晩発生梅毒に起因する内耳炎」なる学位論文を纏めて、ドクトル・メヂチーネの称号を得た。明治二十九年六月に八年間の留学を終えて帰国した。

同年八月、神田駿河台南甲賀町十番地に小此木耳鼻科医院を開業した。このとき長谷川泰は小此木邸を訪ねて済生学舎の耳鼻咽喉科講師を依頼している。済生学舎医事新報第四十六号(明治二十九年十月十五日発行)に小此木講師の招聘記事が掲載されている。

済生学舎廃校後は、明治三十九年六月に至り、再び日本医学校で耳鼻咽喉科の臨床講義を行っている。学校騒動後は、中原校長を助けて理事長として、「済生学舎以来の歴史ある日本医学専門学校を再興せねばならぬ」と固く誓って再建に努力した。又募金活動に歩いたと伝えられる。

○塩田⁽¹²⁾広重⁽¹³⁾



塩田広重学務顧問

塩田広重は、明治六年十月十四日に京都府与謝郡宮津町柳縄手二十五番地で、父塩田^{しげたけ}重威の子として生まれた。父は宮津の小学校教師であったが、母方の叔父に齋藤仙也医学士(東大医学部明治十五年卒)がいて、当時京都府立病院院長であった。その影響で医学の道を志す事となる。

塩田は東本願寺中学から大阪の第三高等学校予科補充に入学するが、思うところがあつて三高を中退し、明治二十三年に第一高等学校に受験して入学している。

明治二十八年九月に東京帝国大学医科大学に入学した。この時、同級生の中原徳太郎と親交を結ぶ。在学中にスクリバ教授の講ずるレントゲン医学に関心を持ち、後に胃癌の研究の端を開く。

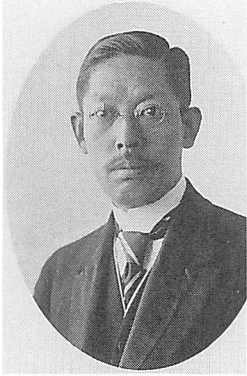
明治三十二年に卒業して直ちに外科学を専攻し、大学院に入り、病理学を一年間研究す。後日病理学に基いた急性腹症の研究が始まる。

明治三十四年四月、済生学舎舎長の長谷川泰に招聘されて外科学講師を兼任しながら明治三十五年十二月五日には東京帝国大学助教授に任ぜられた。明治三十六年済生学舎が廃校となるや学生救済のための「同窓医学講習会」の外科学及び、臨床講義を行う。更に日本医学校が明治三十七年四月に創立されるや外科学講師を兼任した。

明治四十年三月に私費留学でドイツに渡り、明治四十二年十月に帰国した。明治四十四年医学博士を授与され、大正三年九月には日本医学専門学校教授を兼任す。大正三年十一月より第一次大戦のために日本赤十字救護班長としてフランスに出張し傷病者の救護に当たり、大正五年九月十九日に帰国した。

大正七年理事となり内紛によって荒廃せる日本医学専門学校を中原、小此木、近藤と諮り学校復興の原動力となる。

大正十一年二月二十二日、東京帝国大学教授に任ぜられ、外科学第二講座担任を命ぜらる。同時に東京帝国大学医学部附属病院分院の院長に就任している。



近藤達見学監

塩田は右の如き多忙な生活の中で、日本医学専門学校の発展のために尽力を惜しまなかつた。

○近藤達見⁽¹⁾

近藤達見は福島出身で父近藤玄貞は医師であつた。消化器病の大家南大曹は実弟に当る。明治四十二年に東京帝国大学を卒業し、弁護士となつた。また衆議院議員として活躍す。

大正七年、日本医学専門学校が経営難に陥った時、中原、小此木、塩田の三氏と協力し、理事及び学監に就任した。当時極度に疲弊せる財政整理の難局を、独自の法律的知識と俊敏果斷な実行力で、幾多の難件を処理し、医学専門学校としての存在の危機を脱せしめた。

また日本医学専門学校校友会会長及び大正十四年には予科教授として、国語、漢文、修身等の授業を担当した。近藤は病弱な体質であったが能く中原学長を補佐し続けた。

四、「克己殉公」の建学の精神

学内では学校騒動の後遺症があり、立ち直るため、強力な教育方針を立てる必要があった。大正七年四月中原徳太郎校長は就任するや建学の精神を打ちたてた。

小此木、塩田、近藤の意見を聞き色々協議の結果、日本医学専門学校の建学の精神を「克己殉公」と定めた。これは、小此木がドイツに留学中に購入した書物、フーフエランド (C. W. Hufeland) の内科書の中の『医戒』の項から引用した。

フーフエランド⁽¹⁶⁾は、ドイツのベルリン大学の教授で、ゲーテと親交のあった学者であり、一七六四年〜一八三六年頃の人物である。フーフエランドの『医戒』の中に、「己を捨てて、他の為に生くるは、固より医道の本質なり」の言葉に漢字を当てて、「克己殉公」と定めたのである。

「克己殉公」の言葉の中に、金銭を追い求めることを戒めたフーフエランドの精神が含まれている。

因に、済生学舎の建学の精神である「済生救民」もまたフーフエランドの書を長谷川泰が読んでその原典の趣旨から採用したものである。

五、学則の改正

中原徳太郎は校長に就任後、先ず医学専門学校の指定を受けるために、大正七年十一月六日、「学則改正認可願」を文部大臣中橋徳五郎宛に提出している。

「私立日本医学専門学校学則」⁽¹⁷⁾

第一章 総則

第一条、本校は医学を教授する所とす。

第二条、修学年限は四ヶ年とす。(一部略)

第八条、本校に入学せんとするものは身体健康・品行方正の男子にして、左記の項に該当する事を要す。

一、中学校卒業生。

二、専門学校入学者検定規定に依る検定合格したるもの。

三、同規定第八条、第一号に指定せられたるもの。(以下略)

右の如く規定し、授業料を左記の如く定めた。

「第二十一条、授業料は一学年金壹百円、学生会費金四円、並びに卒業試験料金二十円とし、左の如く分割す。(一部略)
第二十三条・前期試験は第二学年の学年試験に及第したる者に対し、後期試験は第四学年学年試験に及第したる者に対し、左記の科目に就いて行う」(以下略) 以上の如く学則を制定し、官立並の医学教育を函った。

六、医師法第一条による「指定」申請書

学業も次第に充実して来た、大正八年二月中原徳太郎は、小此木理事長名義で左記の指定申請書を文部大臣に提出し

た。

「指定相成度儀に付申請⁽¹⁸⁾

医師法第一条第一項第一号に依り、御指定相成度、別紙書類相添へ此段及申請候也

東京市本郷区駒込千駄木町五十九番地

財団法人日本医学専門学校

理事長 小此木信六郎 印

大正八年二月七日

文部大臣中橋徳五郎殿

当時の学生数は、『日本の医界』⁽¹⁹⁾二九八号の報告では、「卒業生本邦人八十三名、留学生二十八名、現在学生、本邦人四百四十名、留学生十八名」と報じている。

また「現在の敷地二千三百坪、器具器械、標本六千二百六十五円、校舎建物十六棟、千〇六十五坪、図書七百七冊」と報じ、将来大学組織として、医学の最高学府たらしめんと念願していると記している。

小此木理事長⁽¹⁸⁾の文部省に提出した書類によると、次の如く報告している。

「正確なる現在生徒の学年及び学級別人員」(大正八年一月一日調査)

○第一学年一一二名(本邦人一〇六名・中国人三名・フィリッピン人三名)

○第二学年一〇九名(本邦人一〇四名・中国人三名・台湾人一名・フィリッピン人一名)

○第三学年九七名(本邦人九三名・中国人二名・フィリッピン人二名)

○第四学年(第一学期)三四名(第二学期)一〇名・(本邦人二九名・中国人六名・フィリッピン人九名)

○卒業受験生一四名

合計全学生数 三七六名

「卒業生の員数及び卒業後の状況」

第一回卒業生三〇名

医術開業試験合格 二四名

第二回卒業生三〇名

右合格者 一四名

第三回卒業生一八名

右合格者 七名

合計 七八名

合計四五名

卒業生の少人数であることは、未だ学校騒動の後遺症が残っていたことを示すものであり右卒業生の卒業後の様子は、(徴兵二・公吏二・自宅開業三五・病院研究七)と報告されている。

ようやく軌道に乗った日本医学専門学校の教員の氏名と担当学科目、及び専任、兼任の区別は左記の通りである。

「修身・兼任・

文学士 増田惟茂

独乙語・専任・

文学士 鈴木恒治

独乙語・専任・

文学士 春日主税

化学

医学士

医学化学) 専任

薬学士 米倉昌達

解剖学・兼任

医学博士 二村領次郎

解剖学・専任・

医学士 池田孝男

解剖学・兼任・

医学士 上田常吉

生理学・兼任・

医学士 佐々貫之

医化学・兼任・

医学士 河本禎助

衛生学・兼任・

医学士 古瀬安俊

衛生学

医学士 丸茂 猛

細菌学）専任・

医学博士 福士政一

病理学・専任

医学博士 福士政一

病理学・専任（専門学校規定第七条に依り認可）

長沢米蔵

薬物学）専任・

医学士 上村直親

内科学

医学博士 二木謙三

内科学・兼任

医学博士 南 大曹

内科学・兼任

医学博士 碓居龍太

内科学・兼任

医学士 西川義方

内科学・兼任

医学士 勝沼精蔵

内科学・兼任

医学士 奥川純二

小児科学専任・

医学士 小杉文吉

外科学・兼任

医学博士 塩田広重

外科学・兼任

医学博士 中原徳太郎

外科学・専任

医学士 岩島寸三

外科学・専任

医学士 岩島寸三

外科学・専任・

産科学・兼任

産婦人科学専任

婦人科学・兼任

婦人科学・兼任

眼科学

眼科学・専任・

耳鼻咽喉科学兼任

耳鼻咽喉科学専任

法医学 兼任（専門学校規定第七条に依り認可）

精神病学・専任

皮膚病学・兼任

皮膚病学・専任

体操 専任

医学士 井上重吉

医学博士 相馬又次郎

医学士 鶴岡正一

医学士 今井環

医学士 今井環

医学博士 小川劍三郎

医学士 坂原愛治

医学士 桑名龍太郎

医学士 宇田清

宮永学而

医学士 斎藤玉男

医学士 広田康

医学士 折笠清秀

陸軍中尉 塩見磯吉

北浜章⁽²²⁾氏の報告によると、学生達の当時の実態は次の様であつた。

「学校の授業といえは、講義が多く、朝八時から五時まで、二時間ずつ続く講義で、学生は全ノートをとることに終始する一日というわけで、ヘトヘトになつた。

教務では講義時間が多いことを自慢としていた。ちよつと忘れてノートをとらないと後の整理に困るから、熱心にノートをとつた者もあり、ノートをまとめてプリントにして、分けて試験に備えた。」

七、文部省の指定認可

中原校長は、大正三年七月に日本橋高砂町に設立した中原病院の収入を以て、日本医学校の経営の一部に当てると共に、自らは学校からの給料は当分受け取る事を見合わせる事とした。

校長自らの姿勢は多くの教職員賛同するところとなり、学内の充実は次第に図られて来た。かくて、大正八年八月十九日、長年の念願であつた文部大臣指定の専門学校の認可が得られる事になった。それは、明治三十六年の済生学舎廃校以来、十七年間に亘る苦難の道程であつた。

即ち、明治三十九年に制定された「医師法」⁽²⁰⁾の第一条第一項の末尾にある、「医師たらんとする者は、大学令による医学士、又は官立若しくは文部大臣の指定したる私立医学専門学校医科を卒業したるものに限る」(傍点加筆)との項目に該当せしめたのである。

ただし、文部大臣の認可を得るために更に左の項目の不備な点を改善するように求められた。

「記」⁽¹⁸⁾

一、実習用患者数並に実習用解剖屍体の数を更に、相当数増加する方法を講ずること。

二、産科模型演習に於て、生徒二十人に対して、「ファントーム」一基を備へ、模型胎児の外、初生児屍体を使用すること。

三、大正八年度中に、基本金を相当増加すること。

右の条件を出来るだけ早く充足した日本医学専門学校は、左記の通知を文部省より正式に受けとつた。

「文部省告示第二一一号

日本医学専門⁽¹⁾学校⁽²⁾₍₂₃₎

右は医師法第一条第一項第一号に依り、指定す。但し、此の規定は大正九年九月以降の卒業生に限り、効力を有するものとす。

大正八年八月十九日

文部大臣 中橋徳五郎 一(傍点加筆)

ここらでたく医師試験を受けずして、他の官立・公立・私立医学専門学校卒業生と同等に、医師の資格が得られる事となった。但し、大正八年九月以前の卒業生で資格の無い人は再編入して卒業し、医師の免許を得た者もあつた。

同年十月、上野精養軒で専門学校指定の披露祝賀会が開催され、約二百人の朝野の名士が参加して挙行された。

また同年五月には本校図書室に、東京帝国大学医科大学教師スクリバ (Julius Scriba) の遺族フィリツ・スクリバより、書籍約五百冊が寄贈され、それを基にして今日日本医科大学図書館の原形が出来た。

同年十二月には、指定後第一回⁽²²⁾の卒業生三十二名と聴講生一名の学生が巣立つた。

しかし規約により、大正九年九月以前の卒業生は全て医師試験に臨んだ。その主な人々は大正六年卒業の中井卓次郎・八木忠作・小室卓爾・大正七年卒の藤牧玄雄・大正八年卒業の河野勝斎等が後者に含まれる。

その陰に前述の中原、小此木、塩田、近藤の四名の理事の他に、福土政一(病理学)、二村嶺次郎(解剖学)、南大曹(内科学)、西川義方(内科学)、長沢米蔵(病理学)、塩見磯吉(体操)等多くの専任教授の功績があつたことを附記しておく。

八、専門学校から大学昇格の準備

中原徳太郎は前記の如く、大正八年八月十九日、文部大臣中橋徳五郎より、正式に医学専門学校の指定を受けたが、

大学昇格迄の道は大変険しかった。

当時の日本医専の学生は、地方の農村の出身で、旧制中学を卒業して入学して来た人々が多かった。その受験生と、入学者数を調査したので、左記の表に纏めて報告する。

日本医専の入学志願者と合格者数⁽²⁴⁾

○大正五年、一九八名、合格者一一〇名
○大正八年、一八二名、合格者一一七名

(聴講生八名)

○大正九年、九〇五名、合格者一三二名
○大正十年、五六〇名、合格者一二〇名
○大正十一年、九四八名、合格者一六〇名
○大正十二年、一九八名、合格者一六〇名
○大正一五年、二、〇七二名、合格者一六〇名

大正九年二月には、予科(二年制)を設け、五年制の医学専門学校とし、中原校長は大学昇格の準備にかかった。更に定員増加を文部省に申請した。

大正十一年一月になると、正式に「看護教育」に着手し、本校附属医院「看護講習所」を設立した。また同年四月には東京帝国大学薬理学教授の「林春雄」(明治三十年東大卒)と、帝国大学医学部、入沢内科教室の「平山金蔵」(明治三十六年東大卒)が、財団法人日本医学専門学校⁽⁶⁾⁽²⁵⁾⁽³⁷⁾の理事として迎えられた。これは長い間文部省の陰の実力者として私立医学校の撲滅論を唱えて来た入沢達吉東大教授が、中原徳太郎の人物に惚れこんで、従来^ての姿勢を変更したためである。

即ち文部省視学委員の責任の下で、入沢達吉が、日本医専の復興の梃子^て入れのために派遣させて来たのが、林春雄、

平山金蔵の両理事であつた。

次に、中原校長は大正十年十二月一日、校舎の本館（百三十五坪、二階建）を文部省に新築すべく申請している。これが校門正面の戦前の本館である。

「教室新築認可申請書」⁽²⁶⁾

今般本校教室新設致度候間、御認可相成度別紙書類相添之此段及申請候也。

大正十年十二月一日

東京市本郷区駒込千駄木町五十九番地

財団法人日本医学専門学校

理事長 小此木信六郎印

文部大臣中橋徳五郎

九、飯田橋の附属第一病院の購入と大震災

次に飯田橋の日本医科大学第一病院の歴史に触れてみたい。

大正十一年十月、中原徳太郎は将来医学専門学校より、大学に昇格するための臨床実習病院の必要性を考え、麴町区飯田町の「財団法人皇典講習所・国学院大学」の所有地千四百四十七坪と、建物八百十坪の購入契約を行った。国学院大学が渋谷に移転した跡地を附属病院として使用することにし、明治十二年八月に右の届書を提出した。購入代金は三十万円であつた。同窓会からも、寄附金二万九千円があり、中原徳太郎に協力した。

「大正十二年八月一日」⁽²⁷⁾

東京市本郷区駒込千駄木町五拾九番地

財団法人日本医学専門学校

理事長

小此木信六郎^印

文部大臣鎌田栄吉殿

附属病院増設の件

今般本校業務拡張の為、東京市麴町区飯田町五丁目八番地、財団法人国学院大学所在地壱千二百九十六坪七合五勺、建物七百十四坪二合五勺を全部有形の仮買収シ、登記を了シ候に付、之に改造を加へ、在来の附属病院の外、更に一の附属病院を増設し、左記に依り、臨床実習用病院とし度候間、御認可相成度、公立私立専門学校規定第一条第四項に依り此段申請候也。

記

一、買収価格 金參拾万円

一、登記年月日 大正十二年五月二十六日

一、敷地坪数 壱千二百九十六坪七合五勺

一、建物坪数 七百十四坪二合五勺

一、従来の校舎図 別紙の図面通り

(以下略)

ところが病院として購入して、一度も使用せずして、関東大震災が突如として起こり、総ての建物は焼失してしまつた。その時の苦しみを中原(徳太郎)は次の如く報告している。

「九月一日午前十一時五十八分、東京附近大震災に襲はれ、大廈^{たいかこうろう}高樓相尋ねて倒潰し、火災は八方に起り、焰は天を焦がしたるも、本校並びに本郷附属病院は軽度の災害を被れるのみにして、其の厄を免れたるも、不幸にして、飯田町

附属医院は、午後三時頃、類焼し、建物八百十四坪は全部烏有に帰せり」と。

更に日本医専では、学生、教職員の中に多数の犠牲者を出し、震災後一ヶ月経過してやっと講義を再会した。十一月に入り、本郷駒込吉祥寺で、しめやかに学生、教職員、卒業生の追悼会が行われた。

十、大学昇格運動

大震災から復興期の大正十三年一月に、日本医専では「校歌⁽³⁰⁾」を制定した。その一節に、「精進力行五十余年、貫く殉公克己のこころ」と謳っている。「精進力行五十余年」は済生学舎創立時を意味するものである。

大正十三年七月、焼失した飯田橋病院の跡地に、拓殖大学の寮を移築し、木造二階建の仮病院を造り開院した。

大正十四年三月になると、震災より脱して、久しく懸案であった医専の大学昇格運動が学内に高まった。

学生達は、「大学昇格期成同盟⁽³¹⁾⁽³²⁾」を設け、認可のために文部省に提出する五十万円の基本金の募金を開始した。学生達は各自「二百円」の募金に応じた。岩手県出身の学生の父は、一夜の中に田畑を売って、夜行列車に乗り、二百円を東京の息子に届けたと伝えられる。涙ぐましい昇格への熱望は、「十六万円⁽³³⁾」の募金額に達した。在学生八百名が募金に応じたのである。

この十六万円を公債に換え、中原、小此木、塩田、近藤の四名は工面して、二十五万円を文部省に供託して、五十万円の半額を得て昇格が実現したのである。

ところが後に学生達は、募金の見返りに、「医学士」の称号を求めて、大正十五年六月一日、総ストライキを半日行い、中原学長を苦しめる事になった。

中原学長は政治的手腕を発揮し、大学昇格の意を含み、大正十三年五月憲政政党より衆議院に立候補し、当選している。更に憲政党幹事長の要職につき、浜口雄幸総裁を助け、入沢達吉の声援を受け、大正十五年一月、「日本医科大学設置申

「請書」を文部大臣に提出した。

直ちに大正十五年一月に、日本医科大学設置申請に対する実地調査があり、文部省より、長与東京帝国大学教授、葉山文部省督学官、他二名の来校があった。

大正十五年二月二十五日付を以て、大学令に依り、「日本医科大学設立の件」は文部大臣より認可された。

〔東專一〇号〕

財団法人日本医科大学

大正十二年十二月二十五日申請、日本医科大学を大学令に依り、設立するの件、認可す。

大正十五年二月二十五日

文部大臣岡田良平

┌

これも総て、中原の人間性と、政治的力量に依るものだと、多くの人々が認めるところである。しかし大正十五年二月二十一日、政友会の黒住代議士(34)(35)により、「日本医専昇格に関する緊急質問」を行い、新聞紙上を賑にぎわせた。「大学に昇格した日本医専に、専門部の学生の一部を予科に編入させ、更に専門部の欠員を編入募集した事は、違法である」と訴えたのである。

国会でのこの様な騒動も急速に鎮静した。大学内では、進取の気象に燃えた学生達の祝賀会(36)が、大正十五年四月二十五日に開催された。また学外に対しては左記の祝賀会が行われた。

十一、昇格の祝賀会

大正十五年五月七日午後五時より、「日本医科大学開学披露祝賀会(37)」が上野精養軒で開かれた。若槻首相、安達通相等政界の人々、及び医学界の長老岡田和一郎、河本重次郎、金杉英五郎、入沢達吉等が列席した。また本郷区の住民等千

五百人が参集した。

中原学長、塩田、小此木、近藤の各理事者は来賓に挨拶の交換を行い、福士政一教授の司会で、中原学長は壇上に昇り、次の様な演説をしている。

「抑、^{そもそも}本学は明治中葉から、故長谷川泰先生の経営されていた済生学舎が廃校後、其の衣鉢を継いで起つた日本医学校、東京医学校等を合併したものである」と済生学舎と日本医科大学の関係を述べ、更に言葉を加えて、「由来我校は、物質的には真に孤立、独立独歩で今日まで経営して来たのである。(中略)今後完全なる医科大学に発展する為に、皆様の御支援をいただきたい」と情熱を込めて挨拶をした。最後に入沢達吉の万歳三唱があり、午後八時に散会した。

十二、中原、小此木及び近藤の急逝

かくして、日本医科大学は昇格により、学内に活気が満ちて、次第に充実していった。昭和二年一月に、本館の横に鉄筋コンクリート四階建(地下を含む)四八〇坪の校舎を竣工させた。

ところが中原学長⁽³⁹⁾⁽⁴⁰⁾⁽⁴¹⁾の健康に急な異変が起きた。昭和二年十一月十二日の大学の解剖祭に出席した時、頸部に小豆大の蜂窩織炎が生じている事に中原学長は気付いた。十一月十四日、日曜日の夜、中原は五人の患者の手術を中原病院で執刀し疲れ切つた身体でその夕刻、浜口総裁邸に部下の桜井謙治を伴って出かけた。

午後十時頃、帰宅途中の車中で発熱を覚えた。頸部の蜂窩織炎から敗血症が誘発されたのである。急拠、国崎政治主治医、塩田広重、稲田竜吉、入沢達吉、木村徳衛、西川義方、山田弘倫、平山金蔵、福士政一、井上喜重等の医学者が駆けつけ、必死の加療がなされた。

諸大家の手当も全て効を奏せず、昭和二年十一月十七日に肺炎を併発し、中原学長は不帰の客となった。当年五十七歳の若さであった。もし健康が続けば、次期の文部大臣の声もむなしく、責任感の強い中原は、民政党相談役、日本医

科大学学長の肩書だけ残して急逝した。

悲しみに陥った日本医科大学では、次の学長の職に、小此木信六郎の就任を懇請した。小此木理事長は、我国の耳鼻咽喉科のバイオニアであり、大学内部に在って拮据^{きつぎよ}、経営に自ら専念し、表面に現われる事を欲しない人物であった。

昭和二年十二月十五日、学内をあげての推挙に応じて学長に就任した小此木学長⁽¹²⁾⁽¹³⁾は、長年の人生哲学を以て、学長就任の歴史的演説を行っている。

ドイツの医学者、哲学者、フーフェランドの医戒の項に触れ、他が為に生き己の欲望や、金銭を求めての医術を厳しく戒めた、熱の籠った語りかけであった。また、授業に対しては、「学長聴講」の計画を定め実行に移していた。

長いドイツ留学の経験により飯田橋の附属病院の新築計画に着手すべく計画中に、頻発する狭心症発作のため年の改まる頃より、小石川丸山町の自宅で静養する身となり、昭和三年一月六日、狭心症発作のため遂に長逝した。享年六十九歳であった。

一年間に、二人の学長を失った日本医科大学の悲しみは大なるものがあつた。それ程、財政的に孤立した医学校を発展させる事は、難事業であつたといえる。

中原、小此木学長と協力した近藤達児理事長⁽¹⁴⁾も、三年後の昭和六年九月二十二日、郷里福島県議選挙の応援に帰省中、車中で持病の肝炎が悪化をきたし、途中古河市^{こが}で世を去つた。

かくの如く次々に指導者を失い、内容の充実した医科大学になるためには、次の学長の塩田広重の時代を待たねばならなかつた。

当時の医学雑誌⁽¹⁴⁾のコラムに、次のような評論が掲載されていた。

「二年間に二人の学長を死なしめた日本医科大学は気の毒である。もっと気の毒なことは、生命懸^{いのちが}けでなければ学長がつとまらぬため、学長の引き受け手がめつきり減つた事だ。医専にでも還元しなければ駄目かな」と。

十二、まとめ

学校騒動後の衰頹した日本医学専門学校の復興は言語に絶する困難があつた。

校長中原徳太郎は、小此木信六郎、塩田広重、近藤達児と協力して、定着せる教授確保、学則の改正、「克己殉公」の唱導等、新時代に適応すべく学内の充実を図つた。特に中原校長の自らの給料をさしひかえ、時には中原病院の収益を学校建設の一部にした事は、多くの教職員の協力を得る基となつた。

大正八年八月十九日には待望の医学専門学校の指定を文部省から得られた。更に大正十五年二月二十五日の大学昇格迄の道程には、険しいものがあつた。

学生達は、先祖伝来の田畑を売つて、大学昇格のための基本金十六万円を募金した。しかし他方で、関東大震災が起こり、飯田町の付属病院は、購入せるも一度も使用せずして焼失した。ようやく復興を見て、大学昇格を果たしたが、功績のあつた中原徳太郎、小此木信六郎の二名の学長は過労のために相繼いで世を去つて行つた。

次に学長に就任した塩田広重が新しい時代に適応する大学の医学教育の改革に取り組み、本格的な大学機構の礎を基くには長い道程が待ち受けていた。

参考文献

- (1) 唐沢信安「財団法人・日本医学専門学校の学校騒動と私立東京医学専門学校独立分離」『日本医史学雑誌』第四十二卷三号〜四号、平成八年九月及び十二月号
- (2) 磯部檢三「中原徳太郎君を偲ぶ」『医海時報』二〇八一号、昭和九年七月十四日
- (3) 「日本医専の善後策」『医事公論』一六五号、二八頁大正五年八月十六日

- (4) 「東京慈恵会医科大学八十五年史」一三四―一三九頁、東京慈恵会医科大学、東京、昭和四十年
- (5) 「慶応義塾大学医学部二十周年記念誌」一―四頁、一八―三二頁、慶応大学医学部、東京、昭和十年
- (6) 「東京女子医科大学八十年史」三一頁四二―四三頁、学校法人東京女子医科大学、東京、昭和五十五年
- (7) 原三郎「東京医科大学五十年史」一八四頁、金剛出版、東京、昭和四十六年
- (8) 「中原博士突如逝く」『日本医事新報』二七七号、二八頁、昭和二年一月二十六日
- (9) 「小此木日医学長逝く」『日本医事新報』二八三号三六頁、昭和三年一月十四日
- (10) 「日本医事通覧」二六〇―二六三頁、日本医事通覧社発行、東京、明治三十四年
- (11) 横川弘蔵「済生学舎と小此木信六郎」『耳鼻咽喉科』四九卷六号、六九―七九頁、医学書院、昭和五十二年六月
- (12) 塩田広重「メスと鋏」三二四―三二九頁、桃源社、東京、昭和三十八年
- (13) 斎藤渥「塩田広重先生」『日本医師会雑誌』五三卷二十一号、昭和四十年六月
- (14) 「日本医科大学十五年記念誌」二四二―二四四頁、日本医科大学、東京、昭和十五年
- (15) 「日本医科大学十五年記念誌」(克己殉公) 四一―四三頁、二二〇―二四二頁、日本医科大学、東京、昭和十五年
- (16) 伴忠康「適塾をめぐる人々」一一六―一二三頁、創元社、大阪、昭和五十三年
- (17) 「学則改正認可願」理事長小此木信六郎、文部大臣中橋徳五郎宛、大正七年十一月六日(東京都公文書館蔵・303―B₃―11)
- (18) 「文部省・医学専門学校指定申請書」小此木信六郎、文部大臣中橋徳五郎宛、大正八年二月七日(東京都公文書館蔵・303―D₂―14)
- (19) 「日本医専概況一覽」『日本の医界』、二九八号一四頁、大正八年八月三十一日
- (20) 入沢内科同窓会「入沢先生の演説と文章」(医師法 五三三―五六七頁、克誠堂書店、東京、昭和七年)
- (21) 「日本医科大学十五年記念誌」二二四―二二八頁、日本医科大学、東京、昭和十五年
- (22) 「日本医科大学八十年記念誌」五八頁、三六―四八頁、日本医科大学、東京、昭和五十八年
- (23) 「日本医科大学指定」(浴恵)小此木信六郎、文部大臣岡田良平宛、大正十五年二月二十日(東京都公文書館蔵・307―D₃―9)
- (24) 「日本医科大学十五年記念誌」二五―八七頁、日本医科大学、東京、昭和十五年
- (25) 「新潟百科大事典」(入沢達吉) 二〇〇―二〇一頁、新潟日報事業出版部、新潟、昭和五十九年

- (26) 「日本医専・教室新設認可申請書」大正十一年二月一日、理事長小此木信六郎、文部大臣岡田良平宛（東京都公文書館蔵・304-C₂-11）
- (27) 「日本医専付属病院増設の件」大正十二年八月十日、理事長小此木信六郎、文部大臣鎌田栄吉宛（東京都公文書館蔵・305-B₁-8）
- (28) 中原徳太郎による日本医科大学沿革史、大正十五年八月十一日（東京都公文書館蔵・307-D₆-12）
- (29) 「日本医科大学八十年記念誌」（付属第一病院）二五七―二五九頁、日本医科大学、東京、昭和五十八年
- (30) 「日本医科大学十五年記念誌」（日本医学専門学校校歌）五十九頁、日本医科大学、東京、昭和十五年
- (31) 「日本医科大学八十年記念誌」（大学昇格期成同盟）六十五頁、日本医科大学、東京、昭和五十八年
- (32) 「中原徳太郎自筆履歴書」大正十五年二月二十日、大学昇格時の申請書（東京都公文書館蔵・307-D₃-9）
- (33) 「日本医科大学八十年記念誌」（学生の寄付金・日本医科大学認可）四四二頁、四四四頁、日本医科大学、東京、昭和五十八年
- (34) 「不正の生徒募集で中原博士喚問さる」『中央新聞』大正十五年四月八日
- (35) 「専門部補欠募集問題と緊急国会質問」『医海時報』一六四七号、大正十年二月二十七日
- (36) 「日本医科大学内開校式」『医海時報』一六五六号、三一頁、大正十五年五月一日
- (37) 「日本医科大学開学祝賀会」『医海時報』一六五八号、三三頁、大正十五年五月十五日
- (38) 「中原博士突如逝く」『日本医事新報』二七七号、二八頁昭和二年十一月二十六日
- (39) 「中原博士追悼会」『日本医事新報』二九〇号、三四頁、昭和三年三月三日
- (40) 桜井謙治「中原徳太郎追悼文」（中原一雄先生蔵）
- (41) 「小此木日医学長逝く」『日本医事新報』二八二号三六頁、昭和三年一月十四日
- (42) 「往診靴」『日本医事新報』二八三号、三〇頁、昭和三年一月十四日
- (43) 「日本医科大学七十周年記念誌」（近藤達児理事の急逝）二一八頁、日本医科大学、東京、昭和四十八年
- (44) 「日本医科大学七十周年記念誌」（近藤達児理事の急逝）二一八頁、日本医科大学、東京、昭和四十八年
- (45) 「日本医科大学長」『医事公論』八十六号、二四頁、昭和三年三月十五日

（日本医科大学）

The Difficult Path to the Creation of the Nippon Medical College by Tokutaro Nakahara, Shinrokuro Okonogi, Hiroshige Shioda and Tatsuji Kondo

By Nobuyasu KARASAWA

The Nippon Medical School Foundation had declined and was on the brink of being closed as a result of the turmoil of May 1916. In April 1918, on the recommendation of his predecessor Masatsugu Yamane, Tokutaro Nakahara took up the post of Principal of the School. He actively devoted himself to the task of reviving the school with the collaboration of his colleagues Hiroshige Shioda, Shinrokuro Okonogi and Tatsuji Kondo.

For the time being Nakahara waived his own salary. For the construction and maintenance of the school he also donated part of the income from his own Nakahara Hospital. His unselfish enthusiasm induced the teaching and administrative members of the staff to willingly co-operate with him. He revised the school statutes and adopted the phrase 'Kokki-Junko' (Live for others' and not for your own sake) as the school motto.

The school gradually became fully-fledged and on 19th August, 1919, gained the status of a Medical School officially recognized by the Minister of Education. Further, to upgrade the school to a college, Principal Nakahara purchased the former site of Kokugakuin University in Iidamachi to build the School Hospital. Students, for their part, sold their family estates in the provinces and contributed to the

fund-raising. On 25th February 1926 the school was upgraded to a college, but strain and overwork brought untimely deaths to Nakahara, Okonogi and Kondo, one after the other.